

## 『狭衣物語』の歌から『風葉和歌集』の歌へ

— その変化と原因 —

中 城 さと子

はじめに

『風葉和歌集』は、後嵯峨院皇后で、後深草・龜山兩天皇生母の大宮院（西園寺姑子）の命令で、文永八（一二七一）年に撰進された物語歌集である。当時伝存した二〇〇余りの物語から一五〇〇余りの歌を撰入し、二〇巻としたようである。末尾の二巻は散逸し、現存伝本は、一四〇〇首余りを納めている。撰者は藤原為家と推測されるが、<sup>①</sup>実質的には大宮院女房の総力を挙げての撰進事業であつたようであり、<sup>②</sup>大宮院女房のうちでも為家の孫である京極為子が指導的役割を果たしたと推測されている。<sup>③</sup>

ところで、収載されている一四〇〇首余りの歌のうち、現存物語から採られた歌数は、『源氏物語』からの一八〇首、<sup>④</sup>『うつほ物語』からの一一〇首に次いで、『狭衣物語』から採られた歌は五六首であり三番目に多く、この後には、『風に<sup>⑤</sup>つれなき』（首部のみ存）の四五首、<sup>⑥</sup>『いはでしのぶ』の三三首、<sup>⑦</sup>『浜松中納言物語』の三〇首、<sup>⑧</sup>『夜の寢覚』の二五首と続き、以下短編物語では、一首に留まるものもある。採歌数が物語の分量にほぼ対応することからすれば、『狭衣物語』からの採歌数は若干少なく感じられる。

採歌数は上記の歌数であるが、詞書に引用されているものもある。『狭衣物語』の場合、<sup>⑨</sup>五首が引用されている。

『狭衣物語』からの採歌数は、詞書に引用されている歌を

含めると計六一首となる。これら六一首のうち、『狭衣物語』諸本の歌の中に一致するものが現時点では見出せないものは、92番歌・152番歌・193番歌・238番歌・276番歌詞書所引歌・293番歌・408番歌の七首がある。<sup>(6)</sup>

『風葉和歌集』収載の歌が『狭衣物語』諸本の歌に一致するものが現時点では見出せず校異がある例があるように、他の物語においても一致しない例が散見される。これらの『風葉和歌集』と物語歌との違いは、どのようにして生じたのであろうか。本稿では、『狭衣物語』から採られた歌が『風葉和歌集』の歌へと変化したものを取り上げ、その原因を調査する。

## 一 その変化と原因

前掲の『風葉和歌集』（以下、『風葉集』）が『狭衣物語』（以下、『狭衣』）と一致しない七首について、『狭衣』の歌から『風葉集』の歌への変化について考えることとし、以下に『風葉集』の歌番号の順に検討する。

最初に取り上げる風葉92番歌については、『風葉和歌集研究報第一〇号』<sup>(7)</sup>の当該歌の【補説】「歌語「あかぬなごり」について」に於いて、90番歌の「春のかた見」、91番歌の「あだにうつろつ」の次の当該歌が「飽かぬ匂ひ」のままでは配列上不具合があり、「あかぬなごり」と改変したのであろうと論じた。また『風葉和歌集新注』<sup>(8)</sup>の当該歌の【補説】「下句の「あかぬなごり」について」で大塚みつ子氏が、「あかぬにほひ」が平安時代から定着した歌語であり、「あかぬなごり」が平安中期に見え始め平安末期に広く使われるようになった歌語であることを論じておられる。

風葉92 おり見ばやくち木のさくらゆきずりにあかぬな

ごりのさかりなるかと

狭衣歌155 折り見ばや朽木の桜ゆきずりに飽かぬ匂ひ

は盛りなりやと（新全集・旧大系・集成）

表記は先頭に挙げた本による。以下おなじ）当該歌では、『狭衣物語』の新日本古典文学全集・日本古典文学大系・新潮日本古典集成の三本（以下、「狭衣三本」と称し、時に略称を用いる）が同文であり、『風葉集』の歌と狭衣三本の歌とを比較すると第四・第五句に差があり、第四

句「あかぬなごりの」の歌句を持つ狭衣歌は見出せず、第五句が一致するものは『校本狭衣物語』（中田剛直編）の中に見出せる。

第四句 あかぬなごりの…狭衣諸本にこの句と一致するものはない。

第五句 さかりなるかと…狭衣諸本のうち京大五冊本・雅章本・宮内庁四冊本・鎌倉本などが一致。

つまり、第四句「あかぬなごりの」以外では、狭衣歌と『風葉集』の歌とが一致する狭衣本はあるが、第四句「あかぬなごりの」と一致する狭衣本が見出せない。このことにより、第四句は改変されている、と推測したのである。この改変が配列上の必要からなされたものであることは既述したとおりである。なお、第五句「さかりなるかと」と一致する本の中に、『狭衣』から撰入するために用いられた本があるのかもしれないが、本調査では、所用本については触れないでおく。

風葉152番歌については、『風葉和歌集』の依拠本『狭衣

物語』の場合（その二）で取り上げ、狭衣諸本に一致するものがないことから、書き換えの筆が入った、と推測した。

風葉152 よもすがら物やおもへるほとゝぎすあまのいは戸を明がたになく

狭衣歌<sup>13</sup> 夜もすがら物や思ふほとゝぎす天の岩戸

をあげがたに鳴く（新全集）

夜もすがら物や思ふとほとゝぎす天の岩戸を明け方に鳴く（旧大系）

夜もすがら嘆き明かしてほとゝぎす鳴く音をだにも聞く人もがな（集成）

当該の『風葉集』は、第二句のみが異なっている新全集・旧大系に近く、第二句、第四句、第五句が一致しない集成とは遠い。『風葉集』の編まれた時代における狭衣本を反映してか流布本系統の集成とは遠いのであろう。

第二句 物やおもへる…狭衣諸本にこの句と一致するものはない。

この「物やおもへる」の句については、『風葉和歌集新注一』の【語釈】で「物思ひをしている状態が続いていることを強調した表現か」と石原雅子氏が述べておられる。そうで

あるとすると、第一句と呼応させることによる秀逸化を目論んだ、編者の添削の筆が入ったのではなからうか。

風葉193番歌についても、『風葉和歌集研究報第一〇号』<sup>⑩</sup>の92番歌【補説】で取り上げ、「ゆくかたしらぬ」から「ゆくゑもしらぬ」への改作があつたと推測するとともに、この改作が時代の好尚を反映したものであるうことを述べている。

風葉193 わが心かねて空にやみちぬらんゆくゑもしらぬ  
やどのかやり火

狭衣歌19 我心かねて空にやみちぬらん行かた知らぬ

宿の蚊遣火（旧大系）

我が心かねて空にや満ちにけん行く方知らぬ

ぬ宿の蚊遣火（新全集）

我が心かねてや空にみちぬらむ行くかた知らぬ

らぬ宿の蚊遣火（集成）

第四句 ゆくゑもしらぬ…狭衣諸本にこの句と一致する

ものはない。

『風葉和歌集新注』の当該歌の【語釈】「ゆくゑもしらぬ」でも西原志保氏が、歌語「ゆくゑもしらぬ」について平安時

代に四例しか見られないのに対して『新古今和歌集』以後流行したことを述べておられる。

風葉238番歌については、樋口芳麻呂氏校注『王朝物語秀歌選』（岩波書店、一九八七）の239番歌の解説が「風二三八下句からすでに別の物語の可能性もかんがえられよう」とする。

『風葉和歌集研究報第三号』<sup>⑪</sup>所載の『風葉和歌集』の依拠本『狭衣物語』の場合（その二）においても、当該歌が狭衣歌の上句と別の物語の下句が結びついたものであるうことを述べ、その原因としては一丁分の落丁が考えられるとした。

風葉238 たち帰りおらで過うきをみなへし花のさかりを  
たれにみせまし

狭衣歌216

たちかへり折らで過ぎ憂き女郎花なほやす  
らはん霧の籬に（新全集・旧大系）

立ち返り折らで過ぎ憂き女郎花なほやす

はむ霧の紛れに（集成）

下句 花のさかりをたれにみせまし…狭衣諸本にこの下

句と一致または類

似のものはない。

なお、安田徳子氏が、『風葉和歌集新注』<sup>(12)</sup>において、239番歌の【補説】「238番歌と239番歌の間の欠落部分の可能性について」を詳述されているので参照して頂きたい。

風葉 276 詞書 涙にくもる月影はやどゝめてもやぬるゝが

ほなる

狭衣歌 190 恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡

る顔なる（新全集・旧大系・集成）

第四句 やどゝめてもや…狭衣諸本にこの句と一致する

ものはない。

『風葉集』の276番歌の詞書に引用されている当該歌については、梅野きみ子氏が前掲の『風葉和歌集新注』<sup>(12)</sup>の276番歌【語釈】「涙にくもる月影はやどゝめてもやぬるゝがほなる」において、「やどゝとめてもや」は「やどるそでもや」の誤伝か、とされている。

仮名七文字の『狭衣』の句「やとるそでもや」と『風葉集』の句「やとゝめてもや」において、五文字が共通し、残る二文字に「る」から「ゝ」、「そ（曽）」から「め（女）」への誤写が生じたと見ることは出来るので、誤写による変化が起き

たと考えておきたい。

風葉 293 ふるさとはあさぢがすゑに成はてゝむしのねし

げき秋にやあらまし

狭衣歌 100 故里は浅茅が原となし果てて虫の音繁き秋

にやあらまし（新全集）

ふるさとは浅茅が原となりはてて虫の音し

げき秋にやあらまし（集成）

故里は浅茅が原に荒れ果てて虫の音しげき

秋にやあらまし（旧大系）

第二句 あさぢがすゑに…狭衣諸本にこの句と一致する

ものはない。

風葉 293 番歌については、『風葉和歌集研究報第八号』<sup>(13)</sup>において取り上げ、新古今集を受容しての歌語「あさぢがすゑに」へと書き換えが成されたと推測、前掲の『風葉和歌集研究報第一〇号』では、歌語「あさぢがすゑ」が鎌倉期に激増することを報告した。さらに、那須源枝氏が『新注』<sup>(12)</sup>の当該歌【補説】「歌句「浅茅が末」について」で、「新古今時代の歌人が開拓した歌語を取り上げて改作した可能性はある」とさ

れている。

#### 風葉 408

わきかへりこほりのしたはむせびつゝさもわび  
まさるよしの川哉

#### 狭衣歌 75

わきかへり氷の下にむせびつゝさもわびさ  
する吉野川かな（新全集・旧大系・集成）

#### 第二句

こほりのしたは…為相本・吉田本・鎌倉本・蓮  
空本などと一致する。

#### 第四句

さもわびまさる…狭衣諸本にこの句と一致する  
ものはない。

風葉 408 番歌については、第二句・第四句が狭衣三本の歌と

一致していないが、第二句「こほりのしたは」は、狭衣本に  
多数見られる。『風葉集』の第四句は、「…まさる…」である  
が狭衣歌は「…さする…」であり、『研究報第三号』の【表

（巻二物語本文反映箇所該当本一覽）】に示したとおり、

『風葉集』は狭衣歌と一致せず近似するに留まっている。狭  
衣歌の「さする」の「さ（左）」は「ま（万）」と特に紛れや  
すく、「ま」と誤読したことに影響されて「す（数）」と「さ  
（散）」の読み違いが起きたと考えられ、『風葉集』が「…ま

さる…」となったのではなからうか。『風葉集』に「まさる」  
とあるのは、「さする」の誤伝と推測する。なお、「ここので」の  
最上位本と目される『風葉集』陽明文庫蔵甲本（陽甲本）の  
みが「さする」であるのは、風葉歌の原態が「さする」であつ  
たことを示唆しているのかもしれないと注目されるので、陽  
甲本を挙げておく。

#### 風葉集 408

（陽甲本）…わきかへりこほりのしたはむせび  
つゝさもわひさするよしの川哉

### 二 調査のまとめ

以上の調査により、狭衣歌との差のみられる『風葉集』の  
七首における不一致の原因について推測したことを次にまと  
める。

#### （一）編者の筆による改変があつての不一致

樋口氏の述べられていることからは、女房達があらゆる縁  
故を頼って多くの物語を集めたこと、集められた物語は担当  
者を割り当てて秀歌を選出し簡単な詠歌事情を付しそれぞれ

の女房により写し取る作業が行われたこと<sup>15)</sup>、その作業により物語から集められた歌は、女房達の指導的立場にあつた京極為子（為家孫・為兼姉）によつて、今見る『風葉集』に近いものに編まれたことが推測される。

狭衣歌から風葉集の入集歌へと変化している原因としての添削については、既に為子が添削していて、それを為家が容認したものもあつたと推測されるが、この場合も、あくまでも容認した編者としての為家の添削、ということになるであろう。

狭衣歌と一致しない七首のうち四首は、おそらくは編者による改変によるものと推測したが、その改変は、次のに分類される。

配列上の必要からの改変……………92 番歌

歌の秀逸化を図つての改変……………152 番歌

時代的好尚に合わせた改変……………193 番歌・293 番歌

大宮院の女房達によつてあらかた編まれたであろう歌集は、撰進の最終段階で、編者と目されている為家が、配列を整え、また歌そのものを添削したり、時代的好尚に合うように筆を入れたのであろうが、この添削は、狭衣歌と一致しない七首

のうちの四首を占め、五七%にあたる。つまり、『風葉集』と一致しない狭衣歌の半数以上は、編者の筆が加わつたことによる不一致と考えられる。

## (二) 落丁による不一致

全二〇巻と目されている『風葉集』は一巻が失われてしまつているが、残存の一八巻にも恋部に錯簡が見られるという不幸な伝存状況にある。さらに、先に取り上げた<sup>238</sup> 番歌に見られる落丁の例もあり、その落丁によつて、外見上、『狭衣』の upper 句に別の物語（物語名不明）の lower 句が結びつき一首をなし、狭衣歌との不一致を来している。

## (三) 誤写による不一致

編者の筆による改変は、歌集をよりよいものにしたという思いからなされたものであり、この添削による狭衣歌との不一致は『風葉集』としては認できるものである。これに対して、落丁による改変は、歌集の質を低下させているが、これと同様に<sup>276</sup> 番歌詞書と<sup>408</sup> 番歌に見られる誤写による改変も歌集の質を低下させるものである。

# おわりに

『風葉和歌集』に収載されている一四〇首余りの歌のうち、『狭衣物語』から採られた歌は五六首あり、詞書に引用された五首を加えると計六一首となる。このうち、『風葉和歌集』が狭衣歌と一致しないものは計七首あり、これは大雑把にみて約一割 ( $7 \div 61 = 0.115$ ) にあたる。この数字から見て、他の物語においても『風葉和歌集』と一致しない物語歌がおおよそ一割前後あるのではないかと予想されるが、はたしてどうであろうか。興味深い問題である。

## 注

- (1) 樋口芳麻呂氏は、『風葉和歌集序文考』(上) 風葉集成立・撰者について(『国語と国文学』42 1、一九六五) および、『同』(下)(42 2、一九六五)において、また『風葉和歌集』の本性(『中世文学』40号、一九九五・六)において、『風葉和歌集』の撰者を藤原為家と推測されている。
- (2) 樋口芳麻呂氏校注『王朝物語秀歌選』(岩波書店、一九八七)

- (3) 樋口芳麻呂氏『風葉和歌集』の本性(『中世文学』40号、一九九五・六)
- (4) 神野藤昭氏は、『散逸した物語世界と物語史』(若草書房、一九九八)三五四頁において、『選入歌数からおおよその物語量は推定することが基本的に可能であると判断する』旨を、玉上琢彌『源氏物語研究』(角川書店、一九六六)および三谷榮一『物語史の研究』(有精堂、一九六七)を踏まえて述べておられる。
- (5) 『風葉和歌集新注』(『新注和歌文学叢書』20 青簡社、二〇一六・六)の「添付資料」、『風葉和歌集』所載物語別一覧の四一四頁上欄の「1045 詞部分」は『狭衣物語』からの引用ではないので除外される。従って、『狭衣物語』56 (62) とあるのは、正しくは『狭衣物語』56 (61) である。
- (6) 『風葉和歌集研究報第三号』(二〇〇五・八、名古屋国文学研究会)所載の『風葉和歌集』の依拠本『狭衣物語』の場合「の一九頁下欄で、『風葉和歌集』の歌が『狭衣物語』の歌と一致していない例として448番歌も挙げている。これは、448番歌の第二句を「しめひきはへし」と確定した場合にいえることであり、『風葉和歌集新注』(二〇一八・二、青簡社)所収では本文を「しめひきはへし」とはしなかったのので、448番歌を挙げるのは誤りである。ここに訂正して448番歌を除外する。
- (7) 『風葉和歌集研究報第一〇号』(名古屋国文学研究会、二〇〇九・三)

- (8) 注(5) 所載の『風葉和歌集新注』
- (9) 『風葉和歌集研究報第八号』(名古屋国文学研究会、二〇〇八・三)
- (10) 注(7) に同じ。
- (11) 『風葉和歌集研究報第三号』(名古屋国文学研究会、二〇〇五・八)
- (12) 『風葉和歌集新注二』(『新注和歌文学叢書23』青簡社、二〇一八・二)
- (13) 注(9) に同じ。
- (14) 注(1)(2)(3) の御論
- (15) 樋口芳麻呂氏『風葉和歌集』の入選歌 『竹取物語』『落窪物語』を中心に「(鈴木弘道教授退任記念論集」(一九八五)において、『竹取』と『落窪』では選歌態度が異なっており、別な女房がそれぞれの物語を担当している」旨を結論付けておられる。

(元中京大学教養部非常勤講師)